

「トラスト」論文から「アグネス」論文へ —ガーフィンケル〈信頼〉概念の系譜—

早崎一修

0. まえがき

この論文におけるテーマは次の通りである。

テーマ

1. 「トラスト」論文⁽¹⁾から「アグネス」論文⁽²⁾へのガーフィンケル〈信頼〉概念の系譜
2. これまでの「アグネス論文」理解への若干の批判
3. 〈信頼〉と社会秩序

1では、[浜、1995]と[檜田、1991]の2本の論文をドッキングさせることによって、「トラスト」論文から「アグネス」論文へのガーフィンケルの〈信頼〉概念の系譜を見取ることができる。それをもとに、「トラスト」論文における〈信頼〉概念が、「アグネス」論文を執筆するにあたって、H.ガーフィンケルの中でどのように変化したのか、について述べる。

2では、その変化が一部のエスノメソドロジストらに理解されておらず、それ故に誤って理解されている「アグネス」論文は、本来どのように読まれるべきなのかについて述べる。

3では、〈信頼〉概念そのものについて若干の批判を加える。社会秩序は果たして本当に構成的期待に基づいた〈信頼〉によって成り立っているのだろうか、という疑問について考察する。

それでは、具体的に見ていくことにしよう。

1. 「トラスト」論文から「アグネス」論文へのガーフィンケル〈信頼〉概念の系譜

(1) 「トラスト」論文における未完成の〈信頼〉概念

まず、この節ではじめにに指摘しておくことは次のことである。

「トラスト」論文において、〈信頼〉概念は完成されたものではなかった。

このことを浜の「ガーフィンケル信頼論再考」に依拠して説明する。浜はこの論文の中で、次のことを指摘している。

「ガーフィンケルは、実は、実験結果の中に隠されている興味深い事実を見落と

している。そして、それはガーフィンケルの信頼概念があいまいであったことと関連している」

[浜、1995：60]

つまり、「トラスト」論文では、〈信頼〉概念は完成されていなかったのである。そして、浜は前述の論文で〈信頼〉概念を次のように区別している。

「実はガーフィンケルの信頼概念には、区別されるべき2つの内容が区別されないまま含まれている。……ガーフィンケルからすれば、構成的期待⁽³⁾を付与された基礎的ルール⁽⁴⁾によって定義されるのが出来事の構成的秩序であり、したがって、出来事の構成的秩序に従うことは、同時に構成的期待に支配されることであり、基礎的ルールに従うことでもある……。しかし、ガーフィンケル自身述べているように、『3つの構成的期待はルールの現実の内容に対して不変である』[Garfinkel、1963：200]とすれば、構成的期待に支配されることと、基礎的ルールに従うこととは、独立した事柄であると考えられる。」

[浜、1995：61-62]

このことを記号を用いて説明すると次のようになる。

「構成的期待(1)を e_1 、構成的期待(2)を e_2 、構成的期待(3)を e_3 、3つの構成的期待を合わせて E と表わすことにする。構成的期待を付与される選択肢を a と表わすことにすれば、基礎的ルールは $E(a)$ と表わされる。選択肢には a_1 、 a_2 、 a_3 …… a_n とあり、構成的アクセント⁽⁵⁾の移動によって、基礎的ルールも $E(a_1)$ 、 $E(a_2)$ 、 $E(a_3)$ …… $E(a_n)$ に対して不変であることから個別の基礎的ルール $E(a_n)$ に従うことと、構成的期待 E に支配されていることとは、実は、等価ではない。 $E(a_n)$ は E を前提としているが、 E は $E(a_n)$ からは独立しているのである。人は、個別の基礎的ルール $E(a_n)$ には従っていないけれども、構成的期待 E には支配されていることがある。」

[浜、1995：62]

つまり、〈信頼〉には、次の2つがあると言うことができる。「相手が何らかのルールの従っているであろうという期待を意味する」〈信頼〉と、「相手がある特定のルールに従って行為するであろうという期待を意味する」〈信頼〉の2つがあると。

「相手がある特定のルールに従って行為していても、相手が何らかのルールに従っているであろうと期待することはできる。ここでは、仮に、構成的期待に支配されていることを『信頼0』、基礎的ルールに従っていることを『信頼1』と呼んでおこう。」[浜、1995：62]

このように「トラスト」論文では、ガーフィンケル自身、日常の秩序とゲームの秩序の

違いについて混乱していた（つまり、「構成的期待に支配されることと、基礎的ルールに従うことと」[浜、1995：59-60]を同等のものとみなしていた）。しかし、その後「アグネス」論文を執筆するにあたってその混乱がときほぐれているように思われる。このことについて次に考察しようと思う。

(2) アグネス論文における〈信頼〉概念の完成

「アグネス」論文では、〈信頼〉概念に関する記述は直接には存在しない。しかし、この論文の中で彼の〈信頼〉概念は完成に到ったと考えることができる。つまり、ガーフィンケルはこの論文の中で「構成的期待に支配されること (= 〈信頼0〉)」と、「基礎的ルールに従うこと (= 〈信頼1〉)」の違い、換言するならば、日常の秩序とゲーム秩序の違い、にはっきりと気づいているのである。そして、彼はその違いを、ゴッフマンを批判することによって、提示したと言える。それではそのゴッフマン批判を榎田の「アグネス論文における〈非ゲーム的パッシング⁽⁶⁾〉の意味—エスノメソドロジーの現象理解についての若干の考察—」に依拠して見ていくことにする。

「ガーフィンケルの主張は、アグネスはゲームとして分析できない (= 自覚的でない) さまざまな継続的パッシングをしているのだが、このような事態に対しては、ゴッフマン的な戦略分析 = ゲーム分析は有効ではない、ということになる。」

[榎田、1991：79]

また、榎田は、この論文の中で、ガーフィンケルが「ゲームモデルで分析できるパッシング」と、「ゲームモデルで分析しがたいパッシング」という〈パッシング〉概念の2つに区分していることを指摘し、それらをそれぞれ〈ゲーム的パッシング〉と〈非ゲーム的パッシング〉と呼んでいる。そして、榎田はこの2つの〈パッシング〉を、次のように説明している。

「状況をやり過ごすやり方に関して、それを行為者が前もって知っているのがゲーム分析可能な場合であり、それを行為者が知らないまま状況に立ち向かわなければならないのがゲーム分析の無効な場合とされているのである。」

[榎田、1991：80]

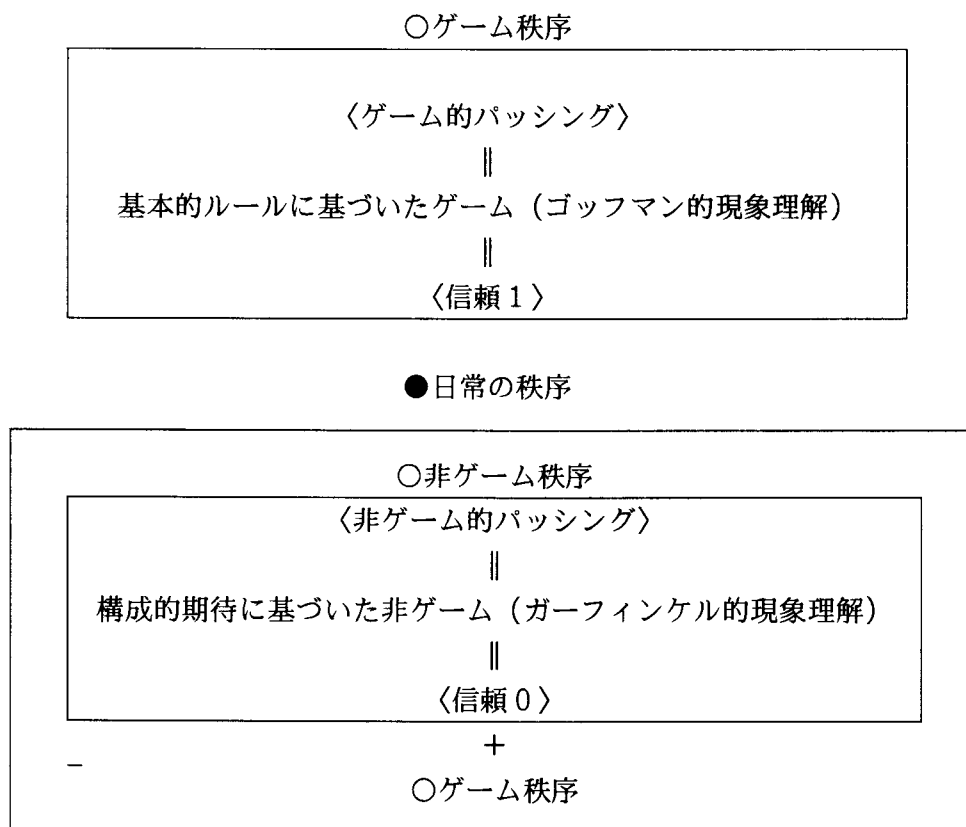
すなわち、

「非ゲーム的パッシングは、自らの目標達成評価の基準やゲームの基本的ルールを、行為者が予期していないパッシングであり、なんとか何とかその場をやり過ごすことによって事後的・遡及的に自らが乗り越えの課題としたルールを見出していくようなパッシングであったのだといえよう。」

[榎田、1991：81]

このように、ガーフィンケルは、「アグネス」論文において、社会秩序を行為者が基本的ルールを予期している秩序（ゲーム秩序）と、行為者が基本的ルールを予期していない（構成的期待に支配されている）秩序（非ゲーム秩序）の2つに区別している。ここで、ゲーム秩序と非ゲーム秩序は、浜の言う〈信頼1〉と〈信頼0〉と同等のものである。そしてこれらは、次のように図示することができる。

図



（ここで、日常の秩序はゲーム秩序を含むものである。というのは、〈信頼1〉が〈信頼0〉を前提としているように、ゲーム秩序も日常の秩序を前提としているからである。）

このように、「トラスト」論文で未完成であった〈信頼〉概念は、アグネスの〈パッシング〉を通して、完成されたと言ってよいであろう。

2. これまでの「アグネス論文」理解への若干の批判

これまで、日本での「アグネス」論文における〈パッシング（通過儀礼）〉は、「トラスト」論文における〈信頼〉概念の理解のまま、理解されてきた。しかし、いまや〈アグネス〉論文は1章で述べたように読まれなければならない。

そこでこの章では、「アグネス」論文は今までどのように読まれてきたのかを具体的に

提示する。

これまでのアグネスの〈パッシング（通過儀礼）〉理解は次のように理解されてきた。

「ゴッフマンは、舞台のリアリティを支える技法は人々の日常のリアリティを支えるそれと同じだ、と語った。アグネスのエピソードはまさにそのことを示している。」 [安川、1989：204]

はたしてそうであろうか。舞台では自分が次に何をすればよいのかがあらかじめわかっている。つまり、ルールを知っている。しかし、日常ではルールは事後的に決まり、何をすればよいのかは構成的アクセントの移動によって、そのつどそのつどにおいて決定する。つまり、このことは前述したゲーム秩序のことを説明していき過ぎない。日常の秩序は、確かにゲーム秩序も含んではいらぬ。しかし、それだけではない。日常の秩序は、ゲーム秩序と非ゲーム秩序から成り立っているのだ。

また、安川はパッシングを次のように定義している。

「あらかじめ与えられている二文法的枠組みの一方に、それと矛盾する諸条件を孕みながらもとどまろうとする、『慢性的な危機状況』に対処する振る舞いの実際（日常生活の些細な動作群：慣習的プラクティス）」 [安川、1989：202]

であると。しかし、これもゲーム的パッシングの定義にすぎない。なぜならば、日常の秩序、の一方である非ゲーム的秩序はゲームでない以上、「『慢性的な危機状況』に対処する」といったような、あらかじめルールを知っていなければならないような〈戦略〉を取ることにはできないからだ。

さらに、「アグネス」論文の日本語訳の題名となっている「アグネス、彼女はいかにして女になりつづけたか—ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」 [山田・好井・山崎、1987：215] も、誤った理解の上での訳出であるように思える。というのも、人々の意図を前提としているような「操作的」といった概念は、やはりゲーム秩序の上でのものと思えるからだ。

そこでわたしは、日常の秩序は人々の意図とは無関係に成立するものである、ということを確認するために次のような邦題が適当であると考えた。

「アグネス、彼女はいかにして女になりつづけたか—ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の**処理的**達成」

3. 〈信頼〉と社会秩序

ここまでガーフィンケルの〈信頼〉概念について検討してきたが、社会秩序は果たして本当に構成的期待に基づいた〈信頼〉によって成り立っているのだろうか。

ガーフィンケルが構築した構成的期待といった概念についてよく考えてみると、何か人々の意図を前提にした心理主義的な概念にも聞こえる。また浜の「ガーフィンケル信頼論

再考」の中で言われている〈信頼0〉や〈信頼1〉といった概念も、いわばガーフィンケルの〈信頼〉という〈ルール〉に事後的に意味づけしたものにすぎない。この〈信頼0〉、〈信頼1〉といった概念はまた、〈信頼-1〉、〈信頼-2〉、〈信頼-3〉・・・といったように無限後退の渦に巻き込まれてしまう。つまり、社会秩序は、ガーフィンケルや浜が言ようにはできていないのだ。ヴィトゲンシュタインは次のように言う。

「われわれのパラドクスは、ある規則がいかなる行動の仕方も決定できないであろうと言うこと、なぜなら、どのような行動の仕方もその規則と一致させることができるから」
[Wittgenstein,1953=1976:162]

つまり、われわれは端的にルールの従っているのだ。そして、ガーフィンケルが言うような〈信頼〉さえも、人々によって協同的に達成されているのである。

〈注〉

(1)「トラスト」論文とは

正式名：「安定的で協調的な諸行為の条件としての『信頼』の概念と、その実験」

[檜田,1991]

〈信頼〉概念：「信頼」とは、構成的期待を付与された基礎的ルールに従うことである。これが信頼と呼ばれるのは、それが期待を本質的要素としているためである。

(2)「アグネス論文」とは

正式名：「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたか—ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」[山田・好井・山崎,1987]

内容要約：生まれつきペニスを持った19歳の白人女性アグネスが、どのように社会生活を女性を維持しつつ切り抜けているのか、を描いたものである。この論文の中でガーフィンケルは、性別というものは社会的に構成されたもの、あるいは日常の中で協同的に達成されたものであるということを主張している。

(3) 構成的期待：「(1) ゲームの範域 [3×3の升目など]、プレイヤーの数、プレーの順序などについて、選択肢が数多くある中で、基礎的ルールは、プレイヤーの観点から見ると、自分の願望、状況、計画、利害、またその選択が自分自身あるいは他者に対してどんな結果をもたらすかにかかわらず、自分が選択することを期待している [選択肢の] セットを構成している。

(2) プレイヤーは、自分を拘束しているのと同じ選択肢のセットが、他のプレイヤーも拘束していると期待している。

(3) プレイヤーは、自分がそのことを他者に期待しているのと同じように他者もそのことを自分に期待していると期待している。〔浜、1995：59〕この三つの特徴を構成的期待と呼ぶ。

(4) 基本的ルール：「これらの三つの特徴（＝構成的期待）が、それらが付着した諸ルールを一つのセットに構成する。このような諸ルールのセット」〔Garfinkel,1963:191＝檜田、1993：56〕を基本的ルールと呼ぶ。

(5) 構成的アクセント：「構成的期待というものはプレーヤの人数のどの数字にも、手番のいかなる順序にも、どんな作りの盤面にも割り当てることができる。私は、構成的期待が、可能な出来事のある特定のセットに割り当てられた出来事の構成的アクセント〔構成的強調〕として述べようと思う。……構成的アクセントは可能な出来事の一つのセットから外されて、他のセットに割り当てられることが可能である。」〔Garfinkel,1963：191＝檜田 1993：56〕

(6) パッシング（通過作業）：パッシングはゲーム的パッシングと非ゲーム的パッシングの二つに分けることができる。前者は、自分が生きていく上で選んだ権利を獲得し、それを確保していく一方で、社会生活を営んでいく際に生ずるやもしれない露見や破滅の可能に備えるもの。後者は、自らの目標達成評価の基準やゲームの基本的ルールを、行為者が予期せずに、なんとか何とかその場をやり過ごすことによって事後的・遡及的に自らが乗り越えの課題としたルールを見出していくものと言うことができる。

〔Garfinkel,1967＝山田・好井・山崎、1987：219〕

《参考文献》

Garfinkel,Harold 1963 “A Conception of,and Experiments with, “Trust” as acondition of Stable Concerted Actions” ,Harvey,O.J. (ed.) *Motivation and Social Interaction*, Ronald Press:187-238。

Garfinkel,Harold 1967 “Passing and the managed achivement of sex status in an interexed person,part1” ,*Studies in Ethnomethodology*,Prentice-Hall,Inc=1987 山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一抄訳 「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたかーある両性的人間としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」、山田・好井・山崎（編訳）『エスノメソドロジー』、せりか書房：215-295。

浜 日出夫 1995 「ガーフィンケル信頼論再考」、『年報筑波社会学』7：55-74。

檜田 美雄 1991 「アグネス論文における〈非ゲーム的パッシング〉の意味ーエスノメソドロジーの現象理解についての若干の考察ー」、『年報筑波社会学』3：74-98。

檜田 美雄 1993 「協同的達成としてのパッシングーエスノメソドロジー的秩序理解の試みー」、江原 由美子編『微視的権力状況に置ける会話分析』科研報告書：55-64。

西阪 仰 1997a 『相互行為分析という視点』、金子書房。

Wittgenstein, Ludwig 1953 *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell. =1976 藤本 隆
志『哲学探究』(ウイトゲンシュタイン全集8)、大修館書店。

安川 一 1989 「第6章 感性リアリティーとジェンダー」、江原由美子 [他] 著『ジ
ェンダーの社会学：女たち／男たちの世界』、新曜社：201-205